

ニュースレター 目次

1. 第 36 回セミナー (龍谷大学) 開催のお知らせ	1-3
2. 新会長から	4
3. 前会長から	5
4. 新役員の選出について (報告)	6
5. 第 19 回総会報告	6-8
6. 第 35 回豊岡セミナー報告	9-18
7. 環境三学会合同シンポジウム報告	19
8. 編集委員会からのお知らせ	20
9. 事務局から	21

豊岡セミナー報告特集

6-1 セミナー報告 (セミナー事務局より)	9-10
6-2 エクスカーション	10-14
6-3 シンポジウム	15-16
6-4 自由報告	16-18

1 第 36 回セミナー (龍谷大学) 開催のお知らせ

【日時】 2007 年 12 月 8 日 (土) 10:00 ~ 16:30

【場所】 龍谷大学大宮キャンパス

※会場校へのアクセス方法

<http://www.ryukoku.ac.jp/web/map/omiya.html>

【参加費】 1,000 円 (予定)

事前の参加申し込みは不要です。参加費は当日会場にてお支払いください。

【プログラム】

■自由報告 (報告 20 分, 討論 15 分) 10:00 ~ 12:25

【A 部会: 被害構造の解決】 会場: 南翼 -202

司会: 堀畑まなみ (桜美林大学)

第 1 報告 朝井志歩 (都留文科大学, 富士常葉大学非常勤講師)

「基地騒音対策の問題点—受苦の集中的局地化—」

第 2 報告 熊田豊 (関西学院大学総合政策研究科)

「『沖縄命の森やんばる訴訟』に関わる沖縄北部地域林道事業実態調査報告」

第 3 報告 寺田良一 (明治大学)

「環境リスク社会と環境情報民主主義—PRTR 制度を事例として—」

第 4 報告 早瀬利博 (長崎大学大学院生産科学研究科)

「環境影響評価と環境争訟の相関—上関原発建設予定地アセスの住民参加を事例として—」

【B 部会: 持続可能性と社会システム】 会場: 南翼 -203

司会: 古川彰 (関西学院大学)

第 1 報告 神頭成禎 (兵庫県立大学大学院環境人間学研究科博士後期課程)

「慣習法的共同体社会における土地観念とその維持・保全

—ロンボク島バヤン集落における慣習法的土地の維持—」

第2 報告 清水万由子（京都大学大学院地球環境学舎博士課程）
「環境ストック概念による持続可能な地域発展の理論的検討
—公害地域の再生をてがかりとして—」

第3 報告 三輪大介（京都精華大学大学院修士課程）
「蔡温の資源管理政策 - 琉球環境史の試み—農務帳と林政7 書を中心に—」

【C 部会：環境言説の多層性】 会場：東覺 -203
司会：野田浩資（京都府立大学）

第1 報告 小林誠（首都大学東京大学院社会科学研究科博士後期課程）
「ツバルにおける海面上昇に対する認識形成—環境言説の受容と体験知の意味づけ—」

第2 報告 佐々木育子（東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学系国際協力学専攻）
「戦前環境史から何を学ぶか—環境思想と行動に見る『国土愛』と『郷土愛』の構造—」

第3 報告 武中桂（北海道大学大学院文学研究科）
「自然保護政策における環境保全の担い手と正当化の論理
—ラムサール条約登録湿地・宮城県熊栗沼周辺水田における『ふゆみずたんぼ』を事例として—」

第4 報告 加藤鉄三（立教大学文学部・非常勤講師）
「『正義の味方』と居住者の間—ジョン・ミューア、シエラ・クラブ、1889-1940—」

■シンポジウム（13:30～16:30）会場：東覺 -204

【テーマ】環境社会学の「研究戦略」はなにか

【企画趣旨】

環境社会学は設立後 15 年を経て、担い手の世代交代が起きようとするタイミングになっている。また最近数回のシンポジウムは、隣接諸領域や現場・実践者との関係を主題化するものが中心だった。こうした中で、最近数年の動向や成果・課題を総括して、新しい展開の土台を作る試みを始める必要があると、企画者としては考える。そこで企画にあたって、1) あえて学としての制度に立ち戻り、社会学をバックグラウンドにした報告者を中心に配置する 2) 中堅から若手と言われる世代の人が、比較的自由に環境社会学会という場の動向について意見を開陳できるような機会にする、ということ考えた。ただし、「環境社会学の新動向」とか「転換点」とかいうほど大げさではなく、各自の個人研究史や現在の関心を比較的自由にご報告いただくことを通じて、環境社会学という場の今後の展開可能性について、少しばかり「棚卸し」をしてみたいかが、ということである。この種の「学会動向を振り返る」ようなシンポジウムは、他の連字符社会学会と比較すると、環境社会学会という場においては極端に少ないと思われる。

環境社会学会の軸として「現場主義」ということが常に言われてきた。船橋晴俊は「T 字型の研究戦略」を唱え、いくつかの事例から理論へと向かっていく研究の方向性をモデル化した。また飯島伸子は、個別事例の収集を重視し『飯島年表』に象徴される膨大な資料収集にもとづいた確実な実証研究の姿勢を貫いた。事例の積み重ねの中から一定の中範囲理論が生まれるということは環境社会学の共通認識のように見える。しかし、そのような「研究戦略」を可能にする認識根拠、背景となる文脈、あるいはそのような姿勢から実りを得るための知の「手つき」のようなもの、が明らかでないと、「現場主義」はしばしば素朴経験主義に陥る。また「研究戦略」そのものが、当初定式化された形のままでよいのか、という問題も当然ある。理論と取り組むことが最初、そのあと実証で立ち位置を見直すという姿勢もありうるだろう。あるいは、「研究戦略」を考えることに意味はない、そもそもそんな言葉は有害であるという意見もあるかも知れない。いずれにせよ、15 年後に改めて「研究戦略」を意識化するという仕掛け

を通じて、学会の来し方行く末を振り返りたいわけである。報告者は、このキーワードだけを共有して自由に報告を展開するが、基本的には各自の個人研究史を踏まえながら、ときには既存の環境社会学研究に言及しながら、他分野・現場・実践との関係や、理論と事例との関係、環境社会学を遂行していくうえで身体化されたスキル、などを議論する。最後の論点については、前回の「市民調査の可能性」の続編という意味合いを持つ部分があるかもしれない。

環境社会学は、他分野との相互浸透を必然とする一方、出入り自由な場として存立危機にさらされやすい脆さをもつ（もちろん、そのようなアドホックな場で構わないという考え方もありうる）。一方では、本来持ちうる、あるいは持つべき、可能性を十分に展開せずに自閉しているという指摘もある。たとえば保健医療や都市環境への展開といった、国際的に注目されている部分への日本環境社会学の貢献は今のところ小さい。こうした「環境社会学の潜在的な広がり」に対して、学会としてはどう対応するのか。一方でよりミクロに視点をズラすと、研究者各自の現場における対象社会との取り組み方にも偏差があるはずだ。このように「研究戦略」は現場レベル・研究者の個人史レベル・学会（史）レベルの3つの水準で論じることができる。それらについて、総括と展望の前段としての論点の掘り起こし、棚卸しをすることも有益であろう。したがって、本シンポジウムに明確な「落としどころ」や「結論」が期待できるはずもないが、たまには立ち止まって、いま - ここの「場」そのものの来し方行く末について、普段言いにくいことをぶつけあうのも良いのではないだろうか。

【司会】中澤秀雄（千葉大学）

【第1 報告】湯浅陽一（関東学院大学）

【第2 報告】関礼子（立教大学）

【第3 報告】谷口吉光（秋田県立大学）

【コメンテーター】船橋晴俊（法政大学）

■ベビーシッティングについて

会場校内にベビーシッティングルームを用意する方向で調整しています。また、会場周辺のベビーシッティングに関する情報も収集中です。詳しいことにつきましては、以下までメールでお問い合わせください。

問合せ先：龍谷大学社会学部・脇田健一 (wakita@soc.ryukoku.ac.jp)

■懇親会について

遠方からお越しになる皆様には、お時間の都合をつけていただくことは難しいとは思いますが、17:30 頃から2 時間程度、京都駅前付近で懇親会を開催したいと思います。30 名程度の皆さんにご参加いただけるものと想定し、計画中です。ご参加いただける皆様は、恐れ入りますが、下記までメールでお申し込みいただきしたいと思います（お申込みいただきました皆様には、受付た旨、返事をいたします）。先着 30 名様で受け付けたいと思います。なお、懇親会につきましては、会場校である龍谷大学より若干ではありますが補助が出ることになっています。参加料金ですが、現在のところ、お1 人様 2,000 円を予定しています。よろしく願いいたします。

申込先：龍谷大学社会学部・脇田健一 (wakita@soc.ryukoku.ac.jp)

【第 36 回セミナー事務局】

脇田健一（会場校）、中澤秀雄（シンポジウム）、丸山康司（自由報告）

2 新会長から

コウノトリと環境社会学 長谷川公一（東北大学）

豊岡のセミナーの折に、寺田会長の後任として新会長を仰せつかりました。2年間の任期を一生懸命務めたいと思います。

1992年の環境社会学会の発足からちょうど15年です。初代会長の飯島伸子先生の急逝という衝撃があったのは、2001年11月3日の朝でした。

本学会の前身の環境社会学会が発足した1990年5月、法政大学の町田キャンパスに53人が集ったときから数えて17年になります。この17年間でふりかえってみますと、歴代の会長、事務局長、運営委員、編集委員等々の方々の努力で、本学会および環境社会学は相応の成果を上げてきたのではないかと、思います。翻訳2冊を入れると、日本語で読める環境社会学の教科書は9冊にもなります。有斐閣の5巻の講座、新曜社の6冊のシリーズもあります。「環境社会学」を明示した人事も珍しくありません。私たちは、環境社会学を「制度化」することに基本的に成功しました。

しかしその制度化も、十分なものではありません。

環境社会学を専門的に学べる大学院は、日本全体としてみると、むしろ実質的に減っているのではないかと、弱体化しているのではないかと、思われます。

春・秋のセミナーでの自由報告の数は必ずしも多くありません。舞台裏では、自由報告の数を集めるのに苦労している実状のようです。またいったん研究職についた方や科研費などをもらっているはずの人たちの研究報告も少ないようです。『環境社会学研究』の自由投稿論文は、新人の登竜門的な性格が強まっています。全体として、中堅の出番が少な過ぎるのではないかと、思われてなりません。

環境社会学は、日本の社会学の中では、国際化が進んでいる分野と評価されていますが、国際社会学会のRC24（環境と社会）関連の国際会議でも、日本からの出席者はほぼ常連化し固定化しています。

『環境社会学研究』13号の「巻頭エッセイ」にも記しましたが、90年代以降、大きな理論的革新がなされたわけではないということも、気になる点です。

あえて厳しい表現をすれば、会員数の拡大と表面的な「成功」の影で、一種の「空洞化」を招いてはいないか、自戒すべきことです。

学会活動の活性化は、何よりも、ひとりひとりの会員の研究活動の充実の積み上げによるものです。

うれしいこともあります。豊岡のセミナーの帰路、伊丹空港までの車中でも、仙台空港までのフライトの中でも、購めたばかりの菊地直樹さんの『甦るコウノトリ』を感銘深く読みふけりました。豊岡のセミナーは大変充実したものでしたが、コウノトリの再生プロジェクトに環境社会学者が大きな役割をはたしていることをあらためて認識しました。菊地さんとは、セミナーの折に挨拶する程度のつきあいですが、この本のページを繰るたびに、若い研究者が地道に地域に根ざして成長し、自問しながら成熟していく姿を実感しました。環境社会学の今後の可能性を考えるうえでも、とても示唆的な好著です。

菊地さんの活躍と成長をとおして、コウノトリに、環境社会学の新しい「希望」を見たのです。

若い方たちの羽ばたきを見たい。

これが、仙台空港でこの本の頁を閉じたときの新会長としての感懐でした。

会員のみなさんの羽ばたきを期待いたしております。

3 前会長から

ローカルな実践・調査の蓄積とグローバルな連携と 寺田良一（明治大学）

私が前任者の嘉田由紀子氏（もちろん、今では皆さんご存知の「もったいない」を掲げた滋賀県知事です）から会長を引き継いだのは、2年前の31回セミナー、「清く正しく美しく？—環境NPOの運動性と事業性」（青森・鰯ヶ沢）のおりでした。その以来のセミナーのシンポジウム・テーマを見てみると、32回「世界遺産という『肩書き』—ローカルとグローバルのほどよい関係をめざして—」（関西学院大学）、33回「新潟・阿賀野川でたどる公害・環境問題の歴史と現在」（新潟・阿賀野川）、34回「実践者／専門家—市民調査の可能性と課題—」（立教大学）、35回「野生動物（コウノトリ）との共存を問い直す」（兵庫・豊岡）となります。

自然エネルギーと世界遺産「白神山地」、公害被害者の方たちの交流と地域おこし、コウノトリと共生できる農業環境づくりなど、いずれも地域の環境問題をバネとした地域づくりが、行政、住民、NPOを横断して大きく地域を変貌させる力を持ってきたことに感慨を禁じえませんでした。とりわけ、「環境」といえばそのあとには「運動」や「紛争」がくつつくのが常で、環境がらみで地域に聞き取りに行けば迷惑そうな顔をされることの多かったわれわれの世代にとっては、環境がポジティブな地域の起爆剤になってきたことには隔世の感さえあります。また、それに環境社会学会のさまざまなメンバーが関与され、多大な貢献をされてきたことも、大きな喜びでした。

むろん、多くの未認定患者を積み残し、「認定基準」の変更のないまま「政治決着」が図られた水俣病や、十分な救済措置のないままさらに国からの仮払金の返却請求で被害者が苦しめられたカネミ油症、引き続き被害など、高度成長期から解決を見ないまま引きずり続けている問題も数多くあります。自然エネルギー導入、京都議定書の目標達成、化学物質リスクの低減などに見られる日本の環境政策の遅れは、相変わらずEUなどの環境先進諸国に比べるといつも周回遅れのランナーのようです。それを考えると決して楽観はできないけれども、私が会長をやらせていただいたこの2年間は、国内各地を見る限り、それでもやはり環境は着実に地域や企業の目標として定着しつつあるように思えましたし、環境NPOの実践を下支えしたりすることを通じて、環境社会学もお役に立てた面があると実感できました。

ところで、この間私自身は、RC24（国際社会学会の環境部会）の役員もお引き受けしていた関係で、国際会議に出席する機会が多く、国内の直接のフィールドとはちょっとご無沙汰していました。まがりなりにも「共生」や「循環」が地域づくりの合言葉になってきた日本と、国際会議で、すでに国家さえも規制できない多国籍企業やむき出しの自由化によって有害廃棄物持ち込みや森林破壊を余儀なくされる途上国や先住民の事例報告の数々の間の大きな断絶に、眩量を感じることもしばしばありました。

しかしながら昨年から今年にかけて、いやおうなくグローバルないしリージョナルな環境問題の連関に目を向けざるを得ない事例がいくつか問題化してきました。たとえば、安倍政権下で進められたアジア諸国と日本との自由貿易協定の中で、日本からの「輸出品目」として水銀や砒素などの有害物質が「リサイクル」目的で含まれていることが明らかになり、フィリピンやマレーシアの環境NGOから「わが国を日本のゴミ捨て場にするな」との非難が寄せられました。この問題は、にわかに、第二の「公害輸出」問題の様相を呈してきました。また、猛暑のこの夏、各地で頻繁に発令された「光化学スモッグ注意報」ですが、原因物質のオキシダントは、中国沿岸部から飛来したものが含まれるという分析結果が報道されました。

高度成長を続ける中国で、昨年環境社会学会が設立され、今年6月末には北京でその設立記念を兼ねたRC24の国際会議が開催されました。またすでにお伝えしたように、日中韓台という東アジア地域での環境社会学会会議の開催も、来年の日本での最初の開催が予定されています。国際派の長谷川新会長のリーダーシップの下、私たちの経験をアジアに、世界につなげていけるよう、期待しております。

4 新役員の選出について（報告）

去る6月23日、豊岡にて選挙を行い、新運営委員を決め、さらに同日および翌6月24日の運営委員会にて、会長および各種委員を以下のように選出しました。なお、新事務局長は、既定により、前運営委員会の推挙によって選出されました。（以下、敬称略、順不同）

【会長】	長谷川公一（東北大）
【事務局長】	堀川三郎（法政大）
【運営委員会】	足立重和（愛知教育大）、帯谷博明（奈良女子大）、菅豊（東京大）、関礼子（立教大）、谷口吉光（秋田県大）・編集委員長、西城戸誠（法政大）、藤村美穂（佐賀大）、細川弘明（京都精華大）・国際交流委員長、堀田恭子（立正大）、丸山康司（東京大）・研究活動委員長、宮内泰介（北海道大）
【編集委員会】	井戸聡（愛知県大）、帯谷博明（奈良女子大）、角一典（北海道教育大）、佐藤仁（東京大）、菅豊（東京大）、関礼子（立教大）・事務局長、谷口吉光（秋田県大）・委員長、船橋晴俊（法政大）、古川彰（関西学院大）、堀田恭子（立正大）、榊渦俊子（淑徳大）、脇田健一（龍谷大）
【研究活動委員会】	足立重和（愛知教育大）、西城戸誠（法政大）、丸山康司（東京大）・委員長、宮内泰介（北海道大）、藤村美穂（佐賀大）、箕浦一哉（山梨県大）、菊地直樹（兵庫県大）、小林滋（建設技術研究所）、嵯峨創平（環境文化のための対話研究所）、風見正三（大成建設）、品田知美（立教大）
【国際交流委員会】	相川泰（鳥取環境大）、赤嶺淳（名古屋市大）、浅野敏久（広島大）、金沢謙太郎（神戸女学院大）、寺田良一（明治大）、平野悠一郎（東京大）、福永真弓（東京大）、ジェフリー・ブロードベント（ミネソタ大）、細川弘明（京都精華大）・委員長、松井理恵（筑波大）
【監事】	鶴飼照喜（信州大）、坂岡庸子（久留米大）

5 環境社会学会第19回総会報告

- 2007.6.23（土）兵庫県豊岡市
1. 議事に先立ち、牧野厚史氏を議長に選出
 2. 寺田良一会長の挨拶

【報告事項】

1. 2006年度事業報告

- (1) セミナー、研究例会の開催
- 第33回セミナー 2006年6月23～25日 新潟市
「新潟・阿賀野川でたどる公害・環境問題の歴史と現在」
- 第34回セミナー 2006年12月9日 立教大学
「実践者／専門家－市民調査の可能性と課題」
- 環境三学会合同シンポジウム 2006年6月11日 明治学院大学
「環境政策研究のフロンティアⅦ・コモンズの現代的意義」
- 特別研究例会・修士論文発表会 2007年3月10日 明治大学
- (2) 『環境社会学研究』12号の発行

- (3) ニュースレターの発行（40, 41, 42号）、メールマガジンの発行（78～96号）
- (4) ホームページの改訂・更新
- (5) 会員名簿の発行
- (6) 運営委員会の開催（持ち回り、多数）、研究活動委員会（持ち回り、多数）、編集委員会（持ち回り、多数）、国際交流委員会（持ち回り、多数）

2. 会員数の推移

2005年度末会員数735名→2006年度末会員数663名（2005年度の入会者38人、退会者21人、資格喪失者91人）

【審議事項】

1. 2006年度決算報告（含む監査報告）

以下のように2006年度決算報告および監査報告がなされ、承認された。

(1) 基本会計

収入			支出		
費目	予算	決算	費目	予算	決算
前年度繰越金	2,255,377	2,255,377	事務経費・消耗品	100,000	19,230
会費	3,153,600	2,991,984	郵送費等通信費	400,000	203,720 *2
利息	223	223	印刷費	350,000	365,600 *3
学会誌売り上げ	1,000,000	1,362,685 *1	会議費	200,000	61,580
雑収入	0	0	アルバイト費	700,000	694,400 *4
			学会誌制作費	2,200,000	2,265,000 *5
			学会誌販売事務局経費	150,000	281,150 *6
			セミナー・例会補助	100,000	275,527 *7
			事業積立金	200,000	200,000
			予備費	2,009,200	0
			支出小計		4,366,207
			次年度繰越金		2,244,062
合計	6,409,200	6,610,269	合計	6,409,200	6,610,269
*1 有斐閣売り上げ学会取り分 982,800 円+学会（販売事務局）直売分 379,885 円（未収金 8,575 円を含む） *2 ニュースレター+名簿発送費 *3 ニュースレター 3回+名簿 *4 学会事務局アルバイト代 *5 有斐閣支払い+英文校正謝金+編集事務アルバイト代等 *6 郵送料+作業補助アルバイト代+倉庫料等 *7 新潟セミナー補助、委員会旅費等					

(2) 事業積立金

	06年度予算	06年度決算
2005年度繰越金	2,400,000	2,400,000
2006年度積立金	200,000	200,000
2006年度末残高	2,600,000	2,600,000

(3) 2006年度末資産

合計	4,844,062 *1
学会事務局振替口座	1,100,464
学会事務局通帳	615,319
学会事務局現金	27,511
旧編集委員会通帳	1,450,703
旧編集委員会振替口座	1,169,850
販売事務局	480,215 *2
*1 事業積立金2,600,000円を含む	

7. 2007 年度事業計画

以下の通り、2007 年度事業計画案が提案され、承認された。

- (1) セミナー、研究例会の開催
 - 第 35 回セミナー 2007 年 6 月 22 ～ 24 日 豊岡市
「野生動物との共存を問い直す」
 - 環境三学会合同シンポジウム 2007 年 6 月 9 日 弁護士会館
「森林保全と持続可能な管理－環境経済、社会の総合的向上と森林保全」
 - 第 36 回セミナー：2007 年 12 月 8 日 龍谷大学
各地区例会、修士論文発表会（2008 年 3 月予定）
- (2) 学会誌『環境社会学研究』の編集・発行・販売
 - ・第 13 号の発行、第 14 号の編集、1 ～ 13 号の販売促進
- (3) ニュースレターの発行（3 回程度）、メールマガジンの発行（随時）
- (4) ホームページの改訂・更新（随時）
- (5) その他

3. 2007 年度予算案

以下の通り、2007 年度予算案が提案され、承認された。

- (1) 基本会計

収入		支出	
費目	予算	費目	予算
前年度繰越金	2,244,062	事務経費・消耗品	150,000
会費	2,862,400 *1	郵送費等通信費	400,000
学会誌売り上げ	1,000,000 *2	印刷費	200,000 *3
利息	1,365	会議費	300,000
		アルバイト費	700,000 *4
		学会誌制作費	2,300,000 *5
		学会誌販売事務局経費	250,000 *6
		セミナー・例会補助	100,000
		事務局備品費	150,000 *7
		ホームページ作成・管理費	550,000
		事業積立金	200,000
		予備費	807,827
合計	6,107,827	合計	6,107,827

*1 会員数663名、うち一般会員7割、学生会員3割、会費納入率80%と想定 *2 有斐閣売り上げ学会取り分60万円、学会直販40万円と想定 *3 ニュースレター3回 *4 学会事務局アルバイト代(5万円/月×12カ月)、ニュースレター発送作業アルバイト代など *5 有斐閣支払い、編集事務アルバイト代など *6 郵送料、作業補助アルバイト代、倉庫料 *7 事務局用PC購入費

- (2) 事業積立金

	07年度予算
前年度繰越金	2,600,000
本年度積立金	200,000
本年度末残高	2,800,000

6 第 35 回 豊岡セミナー報告

6-1 セミナー報告（セミナー事務局より） 菊地直樹（兵庫県立大学／兵庫県立コウノトリの郷公園）

さる 6 月 22 日から 24 日にかけて開催された第 35 回セミナーは、みなさま方のご協力によりまして、無事終了することができました。ニュースレターに誤ったアドレスを載せてしまい、多くの方にご迷惑をおかけしました。この場を借りてお詫び申し上げます。

私事ですが、1999 年にコウノトリの野生復帰プロジェクトに奉職してから、環境社会学の視点に依拠しながら、人とコウノトリが共存しうる地域社会のあり方を、研究と実践のはざまに立ちながら模索しつつづけています。一度野生絶滅したコウノトリを再び地域に戻すというプロジェクト。このなかで、環境社会学の貢献が問われているわけですが、これまで環境社会学者の関心と呼ぶことはあまりありませんでした。「このプロジェクトをもっと知ってもらいたい」「環境社会学者からはどのように見えるのか」。そんな思いが湧いてきて、いつかセミナーを開催したいという気持ちも生じてきました。その一方で、あまりなじみのないテーマだし、関心と呼ぶことはないのではないか、なによりセミナー事務局は大変だということが耳に入ることもありました。

事務局が本格的に動き出したのは、今年の 12 月頃でした。やや遅い出だしとなりましたが、それ以降は徐々にピッチを上げ、事務局の皆さんが打合せのため豊岡に訪問された 5 月 20 日は、自然界？での 43 年ぶりのヒナ誕生という吉日と重なりました。営巣していた人工巣塔をみんなと見上げながら、「豊岡セミナーはきつとうまくいく」そんな根拠のない自信を得ることができました。

このセミナーは、「野生動物との共存を問い直す」という大きなテーマを掲げました。豊岡では、飼育下繁殖による増殖、田んぼや河川の自然再生、里山の整備などさまざまな取り組みが進められています。地域住民、農業者、NPO、企業、行政、研究者等が協働（時に対立）しながら、コウノトリという「種」から「自然」、そして「地域社会」と「再生」への視野を広げて共存の取り組みを実施しているところに、このプロジェクトの面白さがあるといつていいでしょう。プロジェクトのなかで環境社会学が制度化(ポストが用意)され、貢献が期待されていることも大きな特徴でしょう。野生動物との共存、自然再生の現場で高まっている環境社会学への期待。それに対してどのような知識と論理を提供できるのか。アクターとしてどのようにかわれるのか。そんなことを考える場としてセミナーを位置づけました。

本来ならば、人とさまざまな関係がある野生動物との共存、そして「野生」という問題を議論すべきだったのでしょうが、今回はコウノトリの野生復帰に特化した内容になってしまいました。物足りなかった人もいたかもしれませんが、私の経験不足によるものですので、お許しください。

私としては、環境社会学は事例の積み重ねと後付けの学問から、いかに実践・政策にかかわる学問、未来の地域像を描ける学問に脱却できるのか、そのためには環境社会学者はどのように変容しなければならないのか、そんなことを問いかけたつもりです。現状としては、政策形成への関与は弱いと言わざるをえませんが、多様な価値を調整する「再生モデル」の構築に向けて、「聞く」という環境社会学者の手法は大きな武器になるのではないかと考えています。

幸いなことに、プログラムは順調に進みました。心配していた天候は、初日と 3 日目は大雨に見舞われましたが、2 日目は汗ばむほどの天気となり、野外でのエクスカージョンは予定通り行うことができました。

セミナーでは多くの皆さんにお世話になりました。この場を借りて、ご紹介させていただきます。豊岡市立コウノトリ文化館館長の松島興治郎さんには、語り部の会で大変お世話になりました。松島さんのいつ終わるとも知れない情熱的な話は、セミナーの開幕にふさわしいものでした。兵庫県但馬県民局豊岡農業改良普及センターの杉本政子さん、国土交通省豊岡河川国道事務所の後藤佳明さん、NPO 法人コウノトリ市民研究所の菅村定昌さん、豊岡市の佐竹節夫さん、兵庫県立コウノトリの郷公園のスタッフの方々のご協力により、充実したエクスカージョンになりました。袴狹営農組合、新田小学校、カネカソーラテック、河谷営農組合、コウノトリの郷営農組合、パークボランティアの皆さんにも大変

お世話になりました。懇親会は、あんみつ姫と法花寺万歳保存会の皆さんの芸によって大変盛り上がりました。手拍子に包まれ「今までで一番踊りやすかった」とは、法花寺万歳の方の言葉でした。シンポジウムで壇上にあがっていただいた豊岡市長の中貝宗治さん、コウノトリの郷営農組合の暇悦喜さん、長野大学の佐藤哲さん、私の上司でもあるコウノトリの郷公園の池田啓さん、ありがとうございました。未来の物語を描くときの学問（池田啓）、地域環境学（佐藤哲）など、今後の環境社会学のあり方にヒントを与えてくれる魅力的な概念が展示された会場は、人で溢れて熱気に満ち、その勢いで白熱した議論を展開したかったのですが、残念ながらいいところで時間が来てしまいました。

また、城崎温泉旅館協同組合さん、ホテルブルーきのさきさんには、わがまを聞いていただいただけでなく、さまざまな便宜をはかっていただきました。

事務局スタッフも大活躍でした。丸山康司さん（産業技術総合研究所）からは、具体的なアドバイスをたくさんいただきました。金沢謙太郎さん（神戸女学院大学）には、申し込み作業で活躍していただきました。荒川康さん（兵庫県立大学）には、事務作業全般を引き受けていただきました。帯谷博明さん（奈良女子大学）には、自由報告を取りまとめていただきました。萩原なつ子さん（立教大学）には、全般的なアドバイスをいただきました。兵庫県立大学と神戸女学院大学の学生さんも頑張ってくださいました。また西城戸誠さん（法政大学）には、メーリングリストで正しい申し込みアドレスを周知していただき、本当に助かりました。

地元の方々からも、学会関係者からも概ね好評だったようで、一安心しています。今回のセミナーを契機に、地元の方々には環境社会学という学問を、学会関係者にはコウノトリの野生復帰プロジェクトを知っていただけたと思います。このプロジェクトがどう見えたのか、教えていただけるとありがたいです。

セミナーを通して、環境社会学のテーマとして取り上げられることがあまりなかった野生動物の問題に関して、皆さんと共有できたこともあったのではないのでしょうか。参加された皆さまが、もう一度コウノトリを見たい、城崎温泉にゆっくり浸かりたい、豊岡を訪問したいと思われたのなら、これほど嬉しいことはありません。訪問をお待ちしております。ありがとうございました。

会計報告

表のとおり 217 円の黒字となりました。残金については、学会の予算に繰り入れます。

収入の部(①)		支出の部(②)	
参加費	¥2,347,000	宿泊費	¥1,826,955 注1
雑収入	¥42,000	会場費	¥19,150
計	¥2,389,000	交通費	¥84,000
		資料費	¥24,900
		人件費	¥90,900 注2
		懇親会費	¥147,341 注3
		印刷費	¥29,250
		保険料	¥7,029 注
		謝金	¥60,000
		弁当代	¥65,600 注4
		事務局経費	¥33,658
		計	¥2,388,783

6-2 エクスカーション

コウノトリと同じ地表で生きる人びと 百合野（赤星）心（奈良女子大学大学院）

豊岡で開催された環境社会学会、初日の夕食後に行われた語り部の会で、コウノトリ文化館長の松島興治郎さんが一枚の写真を見せながら語った言葉が印象的だった。その写真には、人工巣で羽を休めるコウノトリの真下で、農業を散布する農家の方々が写っていた。「農業をするものとしては、わかっていた。

農業がすべての生物を殺してしまうことを。田んぼから帰るときに振り返ると、虫はいなくなり、ザリガニは動かず、魚は白い腹を見せていた。わかっていながら、生きていくために仕方なく農業を使用した。帰宅後、晩酌ができなかったことが辛かった。アルコールを飲むとその日吸い込んだ農業が体中に回るからだ。コウノトリは、そんな私たちの身体の状態を体現していた。」この言葉から、豊岡の取り組みが、単なるコウノトリの保護活動ではないことをうかがい知ることができた。

エクスカーションは「田んぼでコウノトリを育む」コースに参加した。本コースは、環境創造型農業の「コウノトリを育む農法」について学び、農業や化学肥料を削減するなど、育む農法を実践している田んぼを訪れるものである。まず、「コウノトリの郷公園」の施設を見学し、コウノトリと対面した。次に、「いずし古代学習館」で豊岡農業改良普及センターの職員の方から育む農法について説明を受け、実際に田んぼを見学した。昼には、鳥居という集落が共同出資で経営している「鳥居のさと」で、育む農法で作られたお米など家庭味あふれる昼食をいただき、その後、新田小学校で、中学2年生の女の子4人がリーダーとなって活動している「新田プロジェクトE」の環境学習の取り組みについて話を聞いた。

本コースでは、男性農業者だけではなく女性や次世代の取り組みまで紹介され、豊岡の「地域力」を感じ取れるエクスカーションとなった。特に、農家の方々が農業を使わないことに対する不安を抱きながらも、積極的に育む農法に取り組む姿が印象的であった。生活のために「生産性」や「効率性」という価値を受け入れてきた人びと、そして「害」をもたらしものとして多くの生物を排除してきた人びとが、コウノトリの野生復帰をきっかけに「害鳥」、「害虫」という固定的なイメージから解放されていた。

それぞれの取り組みで共通していたのは、「私たちにとっていい環境は、コウノトリにとっても住みやすい環境だ」という見方だったように思う。希少種の保護となると、人間が優位な立場から、しかも、人びとの生活と切り離して考えがちであるが、当地にはコウノトリに対して同じ地表に生活をするもの同士というまなざしがあったように思う。シンポジウムの最後に、営農組合の方の「サギはあまりうれしくない。コウノトリも何十年後には、数が増えすぎて、問題になることもあるだろう。その時はその時で考えるだろうな。」という正直な言葉に、コウノトリを特別扱いしない当地の人びとのかかわりかたが現れていたのではないだろうか。

環境社会学会豊岡セミナーに参加して 平川全機（北海道大学大学院）

雨の中いくつかのトンネルを抜け、電車で揺られて豊岡にたどり着いた。下り立った城之崎温泉駅には情緒ある温泉街が広がっていた。環境社会学会第35セミナーは、6月22日から24日まで兵庫県豊岡市で開かれた。バスの屋上に取り残された人びとの映像が記憶に残る2005年の円山川の氾濫、最近ではコウノトリをめぐる一連の動きが全国に報道されている。災害とその復旧、コウノトリの野生復帰と自然再生――この一見両立が難しそうな2つの事柄がどのように進んでいるのかという興味を持ってこのセミナーに参加した。

梅雨の季節、豊岡に着いた22日、最後の24日は雨模様となったが、エクスカーションが行われた23日は良い天気恵まれた。皆様の心がけが良いのだろうか。私は、エクスカーション(2)「水害復興と自然再生を両立するコース」に参加した。このコースはコウノトリ市民研究所の菅村定昌さんと国土交通省の後藤佳明さんに案内していただいた。お2人の軽妙なやり取りを聞きながらのエクスカーションは楽しいものだった。

参加者を乗せたバスは、円山川の中洲のひのそ島、コウノトリ郷公園、立野決壊地点、百合地人口巣塔、鳥居橋決壊地点、上郷、円山川防災ステーションと回った。コウノトリの野生復帰に直接関わる場所は、コウノトリ郷公園と百合地人口巣塔であった。コウノトリの郷公園の前には、コウノトリの郷直売所があり、コウノトリを育むような田畑で作られた農産物という「コウノトリの舞」ブランドの農産物などが売られていた。コウノトリの野生復帰と地域の人びとや産業との結びつきの一旦が見えた気が

した。コウノトリは、かつて地元豊岡の方から「ツル」と呼ばれ近い存在であったという。今、野生復帰という新しい「物語」によって地域の方々と結びつこうとしていることは興味深かった。また、百合地人口巣塔には放鳥されたコウノトリの親鳥とその雛を見ることができた。田んぼの中にいたコウノトリは堂々としていて、郷公園にいるコウノトリとはまったく違った印象であった。

残りの地点は、2005年に水害の被害を受けその復旧工事が行われている場所であった。水害時の写真など示しながら分かりやすい説明が後藤さんからあり、復旧工事における自然再生や既存の自然への配慮やミチゲーションを菅村さんが求めるという形のお話の中から、良い意味で緊張と信頼関係が存在しているように見受けられた。災害復旧には、予算の上で時間的な制約があり、その中で自然環境を考えた工事を行っていくことの困難さが伝わってきた。幅広い地域住民の参加や合意という点まで進みきれないということも見え隠れした。こうした点は豊岡だけではなく全国の河川行政においても共通した問題なのではないか。24日のシンポジウムには、菅村さんもパネリストとして登壇し、また前日とは違った角度からのお話しも伺えて理解が深まった。エクスカッションやシンポジウム、参加した皆さんとの議論などからまた研究へのヒントと活力をもらった3日間だった。

コウノトリの愛する豊岡の環境にふれて(環境と経済の共鳴を目指すコース)

三橋奈緒(東北大学大学院)

周囲を山々、そして大きな河川に囲まれた美しい自然を持つこの豊岡の地で、コウノトリの野生復帰はどのように実現されてきたのだろうか。初日にお話して下さった、松島興治郎さんの「コウノトリだけでなく、人間のためにも自然環境を整え、地域社会を成り立たせていこうと誓った。」という決意は、どのように実現されているのだろうか。

環境を良くする取り組みと経済効果との相互関係に着目し、コウノトリにとって、そして人間にとってもより良い共生のあり方を探る。この相互関係をどのように豊岡の人々は実現させようとしているのか。このような関心と期待から、このエクスカッションに参加したが、その充実ぶりに驚くばかりであった。豊かな自然とコウノトリ共生課の方々に温かく迎えられ、様々な取り組みを見ることができたことに、大変感銘した。市長さんやコウノトリ共生課の佐竹課長をはじめ熱心な行政と地域社会とのコラボレーションをうまく行っていることは、注目すべき点であった。

コウノトリは、里に暮らす野生動物として、人々と長く共生してきた。コウノトリが再び人々と共生する日へ向けて、様々な取り組みが行われている。初めに訪れた戸島湿地では、魚の生息や植物の生育など、コウノトリが生活しやすいように様々な工夫がされていた。しかし、人間を保護するための法律に比べ、生物を保護するための法律が追いついていないのが大きな課題であるという。

コウノトリの人工巣棟では、約一ヶ月前に生まれたヒナを親鳥が懸命に世話をする姿が印象的だった。我々のまわりを美しく飛んでいる姿、そしてクラッキングが、自分たちに対する野生復帰への取り組みを励ましているようにも思えた。

中でも印象的だったのは学校のすぐ近くにコウノトリの人工巣塔が立っていた光景である。子どもたち、そして地域の人々の見守る中でこそ、コウノトリは着実に自然へと野生復帰していくのだと得心できた瞬間であった。

農家の方々の様々な取り組みにも、コウノトリと自然環境への深い想いを実感することができた。コウノトリや自然環境に配慮して無農薬農法や有機栽培を積極的に取り入れることはもちろん、村おこしとして無農薬の酒米づくりや豆腐のブランド化を行うことで、経済効果を高めることも考慮されている。このような積極的な取り組みを行う農家の田んぼを「コウノトリの舞い降りる田んぼ」として認定することも、農家の方々の豊かな自然環境への誇り、そして環境意識に高めるための大きな要因となっているという。身近な自然環境への誇りを持つことこそ、環境保全への一番の近道と言えるのではないだろう

うか。身近な自然環境への誇りが経済効果をより高めるために働きかけるようにすることも、今後の大きな課題の一つであるように思われた。

豊岡での、この環境を良くする取り組みと経済効果との相互関係を両立させるための取り組みを見ることができたことは、私自身の調査・研究を進めていくにあたってもとても意義のあるものを感じられた。

豊岡の地で、環境社会学者がコウノトリ野生復帰プロジェクトのために、具体的に貢献されていることも、菊地直樹先生のご著書や2泊3日のセミナー全体をとおして痛感させられた。様々な方々のご活躍に、とても励まされたセミナーだった。地域に根ざした市民団体や行政・研究者の活動がどのようなものなのか、感覚としてつかめたように思う。

本当にありがとうございました。

矛盾を包み込む大風呂敷としての地域生態系 茅野恒秀(法政大学大学院)

例年、梅雨まっただなかの環境社会学会は雨にたたられないかと心配しますが、2日目(エクスカッション)の見事な晴天は、私たちの日頃の善行によるものではなく(修士課程時代には新事務局長に「社会学者は自明のことを疑え」と教わったので…)、まさに豊岡の皆さんとコウノトリたちが私たち一同を歓迎してくださった証し、と信じています。

今回のセミナーに参加するにあたっては、菊地直樹さんの『蘇るコウノトリ』を読み、基礎知識こそ得ていたものの、「コウノトリがよみがえる里」――昨夏のNHKスペシャルで豊岡につけられた、このネーミングを、私などはあまり深く考えずに、「佐渡＝トキ」のような漠然としたイメージとして受けとめていました。

百聞は一見に如かず、を地でいけるのが、環境社会学会セミナーの醍醐味。エクスカッション(「野生復帰を科学する」コース)では、人工巣塔での育雛の様子を見ることができ、郷公園でコウノトリが空を舞う姿を目の当たりにし、昼食は地元の方々のおもてなしを受けました(食材は海山川の恵みそのもの!)。翌日のシンポジウムでは行政、農業者、市民、研究者のそれぞれの立場からの思いをうかがい、セミナー全体を通じて「豊岡とコウノトリ」をめぐるドラマの出演者に連続インタビューができたような思いです。

豊岡市コウノトリ共生課長の佐竹さんは、シンポジウムで「豊岡は矛盾の宝庫」と言われました。しかし豊岡の地に立つと、様々な矛盾を包み込んでしまうような大きな風呂敷が、極めておおらかな形で存在しているような印象を受けました。何が豊岡をそうさせるのでしょうか?――私は、この「おおらかさ」にカギがあるような気がしてならず、セミナー中、あれやこれやと思いを馳せていました(この「おおらか」という表現が適切かどうか、確たるものはありません。「端から見たらおおらかだけど、日々のstruggleを見なはれ…」と突っ込まれることを承知の上で、こんな雑感を述べています)。

懇親会の席上、市長さんは「豊岡に研究に来る人を大歓迎します」と挨拶されました。市による、豊岡をフィールドとした研究活動への旅費補助制度は、他ではなかなかお目にかかれぬ英断の事業です。また、県立大学の自然研究拠点で、それぞれ社会教育施設と併設の形で設置している兵庫県のとりにくみは、他県にはない独自のものです。これらは一見すると市・県の懐の深さを感じさせるとりにくみですが、見方を変えれば各主体の生き残り戦略とも解釈できます。

「コウノトリがよみがえる里・豊岡」――それは、コウノトリだけでなく、野生復帰をめぐる様々な主体の生存戦略によって構成されているのではないかと。帰路、私はこんな考えを持ちました。田園で暮らすコウノトリ、水害とつき合う市民、田んぼからコウノトリを追い出そうとするけれどある程度容認する農業者。当然のことながら、個々の生存戦略は極めてギリギリのところで成立しているはずですが、自然と人間がお互いの生存戦略を認め合い(生存戦略の相互承認)、つきあってきた歴史が、豊岡という土地の文脈に大きく作用し、あれこれを包含するおおらかさの源泉になっている気がしてなりません。

自然と人間の共存ということを考えるにあたって、貴重なきっかけをくださった豊岡市の皆さん、特にコウノトリの郷公園の関係者各位に感謝いたします。

豊岡セミナーに参加して 三上直之（北海道大学）

梅雨空の中、大阪から特急電車で揺られて約3時間、三田、篠山、福知山、山東、和田山と、丹波の盆地をいくつも通り抜け、セミナー会場となる城崎温泉に到着したのは、6月22日の夕方だった。

夕食後、豊岡市立コウノトリ文化館館長の松島興治郎さんのお話を聞く。豊岡で1965年に人工飼育が始まったときから、コウノトリの保護に取り組んできた方である。以来、「暗闇の中をひたすら飼育しつづけ」、1989年、ロシアから寄贈されたペアの繁殖に成功したときには「しびれるほどの感動」を味わったという。その後は毎年増殖に成功、一昨年には自然放鳥が始まり、そして今年、その一つがいから初めて1羽のヒナが誕生したわけである。松島さんは「この瞬間に立ち会えたことを感謝している」としながらも、「今はまだ、コウノトリとどう付き合っていくか、人間の側があたふたとしている。この鳥を受け入れる環境を創造していない」。そう話していたのが印象的だった。

翌23日は朝から晴天に恵まれ、4コースに分かれてエクスカージョン。「野生復帰を科学する」コースに参加した。兵庫県立コウノトリの郷公園の主任研究員、大迫義人さんの案内で、田んぼの中に設けられた人工巣塔（「すとう」と読む）へ、ヒナを見に行く。国内では、43年ぶりに自然界で生まれたコウノトリだ。200メートルほど離れた所から双眼鏡で覗くと、立ち上がっているのが見えた。背丈は親鳥の半分ぐらいだろうか。

その後、コウノトリの郷公園で、飼育や研究に携わるスタッフの皆さんから、放鳥されたコウノトリの行動追跡や、本格的な野生復帰に向けた地域環境の再生、ボランティアによるコウノトリのモニタリング活動など、野生復帰に関わる研究と実践の状況について聞かせていただいた。大迫さんらコウノトリ郷公園の研究スタッフは、兵庫県立大学の教員も兼ねており、行政職員として地域に根ざして野生復帰事業に取り組みつづ、同時に、各専門分野の関心に沿って自由に研究を進めている、とのことである。スタッフの一人は、「豊岡に住んで野生復帰の事業を担いながら、研究者としての活動も自由できる。場合によって肩書きを使い分けることもでき、良いアイデアだと思う」と話していた。地域での実践と切り結ぶ環境学研究の一つのモデルを見せていただいたように感じた。3日目のシンポジウムに参加できなかったこともあり、環境再生の現場で環境社会学は何を求められているのか、他の分野に無いどんな寄与をなすのかといったことも含め、もっと話をうかがい、議論してみたい気持ちであった。

ところで、今回のセミナーでは、自由報告への応募が少なかったとのこと、もっと積極的に報告を、という呼びかけがあった。非常に耳の痛いお話であり、会員として日ごろの貢献度の低さを反省した。この点に関連して、他の参加者と雑談している時に話題になったことだが、エクスカージョン付きの春のセミナーに、自由報告も準備して出かけていくのは少々荷が重い面がある。そこで勝手に思いついたのは、自由報告部会とは別に、開催地での実践・研究を題材にして、参加者が自らの研究について短い報告もしつつ語り合うワークショップなどがあれば、より議論も深まるだろうし、会員同士、自らの取り組みをカジュアルに報告しあう機会にもなって有益なのではないか、ということだ。時間の制約から、セミナーに新たな活動を盛り込むのは難しいとは思いますが、地域密着でのセミナー開催という学会の良き伝統をさらに生かす形が取れればと感じた。

最後になるが、有意義なセミナーを準備してくださった事務局長の菊地会員を始め、実行委員の皆さま、コウノトリ郷公園のスタッフ、地元豊岡の関係者の皆さまに心からお礼申し上げます。

❖ 編集部より ❖ 編集部の手違いで三上直之氏原稿を掲載しなかったため、このPDF版に掲載いたしました。三上氏には大変ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。心よりお詫び申し上げます。

6-3 シンポジウム

「野生動物との共存」の現場における環境社会学への期待

菊地直樹（兵庫県立大学 / 兵庫県立コウノトリの郷公園）

「野生動物との共存を問い直す」をテーマとした第35回セミナーのシンポジウムは、豊岡市長の中貝宗治さんによるコウノトリへの熱い思いがこもった挨拶によって開幕した。コーディネーターは私が努め、豊岡市コウノトリ共生部の佐竹節夫さん、コウノトリの郷営農組合の嘸悦喜さん、コウノトリ市民研究所の菅村定昌さん、兵庫県立大 / 兵庫県立コウノトリの郷公園の池田啓さん、外部からは生態学者で環境社会学会会員の長野大学の佐藤哲さんという魅力的な方々をお招きして、野生復帰の到達点と問題、そこにおける環境社会学的研究の貢献の可能性、研究者のあり方などについて議論が交わされた。コウノトリが野生動物を代表するわけではないが、コウノトリから一点突破して、野生動物との共存の問題につなげていきたいと考えたのである。

最初に、私からシンポジウムの主旨説明を行った。コウノトリの野生復帰は、種のみならず自然、そして地域社会の再生まで視野が及ぶプロジェクトであり、共存のモデルになりうる取り組みである。特に地域社会の再生という観点から、環境社会学の実践的・政策的貢献が求められている。このプロジェクトでは、環境社会学は制度化されているが、その他の野生動物との共存の現場でも、生態学者や行政関係者などの間で環境社会学への期待が高まりつつある。単なる記述・分析の学問であることを超えて、1) 生態学など科学知と現場知の統合、2) 合意形成への貢献、3) 新たな保全・再生モデルの提案などが環境社会学に期待されているといえよう。こうした期待に応えるためには、現場にかかわる環境社会学者の立場性も問い直されていかざるを得ないだろう。環境社会学者は、果たしてどのように変わらうのだろうか。

コウノトリの多面的な意味、コウノトリの生息地は水害常襲地帯であるなど、野生復帰において抱え込んでしまう「矛盾」も私の問題意識として提示した。佐竹さんからは「豊岡は矛盾の宝庫ー考えさせられるまち」というそのものズバリのタイトルで発表していただいた。豊岡盆地の環境とそこに暮らす人とコウノトリのかかわりの歴史、野生復帰に向けた取り組み、豊岡市の環境経済戦略などを概説しながら、地元で長年、コウノトリ行政の一線という現場で培われてきた科学的知識と政策的センス、矛盾の受け止め方が随所に見られた報告であった。

子どもの頃、コウノトリをボッていた（追い払っていた）嘸さんは、「コウノトリ育む農法」の実践と普及を通して、現在はコウノトリと共存を目指している。コウノトリの絶滅要因を受け止め、慣行農法を見直す育む農法の技術、普及過程などについて報告していただいた。コウノトリなら嬉しいが、サギが田んぼに入るといい気がしないという。人間の動物観は矛盾していて面白い。

続いて菅村さんからは、象徴と割り切ってコウノトリという名前を使っているコウノトリ市民研究所の活動ー生き物調査、ビオトープ作り、田んぼの学校、子どもの野生復帰大作戦などーを報告していただいた。但馬では環境問題への発言力をもった提案型NPOとして行政と関係が深く、時には対立することもある。ケンカは市民研とは違った肩書きですというのは、NPO論としても面白い。そんな菅村さんからの、つなぐ役割、法律改正、後継者育成という研究者への期待は、そのまま環境社会学への期待といえるだろう。

池田さんからは、年間48万人もの入園者が訪れるなかでの地域への効果、コウノトリの郷公園での実践的研究について報告していただいた。野生復帰に向けた自然再生は、かつての環境をそのまま取り戻すのではなく、近代化によって得たものを生かしながら創造的に再生していくこと、その場における研究スタンスとは、あらゆる学問を垣根にしたものであり、タスクは原理を発見と事業の成功をつなぐことであると述べられた。よそ者がフィールドに出かけて事例研究を積み重ねるだけでいいのか、環境社会学の枠組にとどまっていいていいのか。そんなボールを投げられたように思う。

WWFJ の自然保護室長に就くなど現場で環境保全を実践されてきた佐藤さんからは、「環境アイコン」という魅力的な概念を使って、コウノトリの野生復帰プロジェクトについて外部者の視点から報告していただいた。コウノトリが象徴する自然環境は、日常生活の周辺にあるなんでもない自然であり、野生復帰プロジェクトの目的は、結局のところ生活に密着した生態系サービスを楽しむことだと指摘された。また、研究者が定住する研究機関として郷公園を評価していただき、地域社会の中で地域の未来を構想する実践的な総合学を提唱された。佐藤さんのご報告は、大人しい？私への叱咤激励であるとともに、「もっと現場に踏み出して、環境問題の解決に向けた学問を構築しよう」という環境社会学者への問題提起であったように思う。

いずれも現場のリアリティにあふれる非常に魅力的な報告であったが、コーディネーターの不手際により、本格的な議論を展開する時間が残っていなかった。気になったのは、報告者のまなざしの微妙な違いである。私がお願いしたこともあって、佐竹さん、嘸さん、菅村さんは矛盾を意識して報告していただいたが、池田さんと佐藤さんは、どちらかというときれいに野生復帰プロジェクトを報告していただいたように思う。プロジェクトの推進、新しい学問の構築という課題に対して、ナイーブ？な矛盾へのこだわりは些細なことなのかもしれない。ただ私は、現場にかかわることにより見えてくる矛盾をとらえたうえで、それを内包しうる保全・再生モデルを提示することが、環境社会学者に課せられた役割であると考えている。

コウノトリの保護の歴史や野生復帰の取り組みを見ると、生態系サービスの享受に限定されないさまざまな価値が存在していることが理解できる。「愛護」や「野生」の問題は、現場にいとそれなりに大きな課題である。佐藤さんが提示される研究者が居住する研究というのは、まさにそうした多様な（時に矛盾する）価値を尊重しながら地域の未来像を構想するものだと思うが、いかがだろうか。いずれにせよ、残された課題は多く、もう一度、時間をかけて議論してみたいというのが、偽らざる心境である。

長谷川公一・新会長は、就任のあいさつで環境社会学の環境問題の解決への貢献について、今一度考え直さなければならないと述べられた。提案する学問としての環境社会学が、野生動物の共存の現場で期待されている。環境社会学会に集う私たちは、どのような意味で環境問題の解決に参加するアクター足りえるのか。今回のシンポジウムが、そんなことを考える場になったのなら、幸いである。

おそらく、私自身の研究は、まだまだ記述と分析に留まっていると評価されるに違いない。そんな私も、アクターとして何ができるのかについて考えさせられたシンポジウムであった。

6-4 自由報告

A 部会：「政策」への環境社会学的アプローチとは？－我々はどんな「専門家」か－

松村和則 (筑波大学)

1 関 美芳 (早稲田大学大学院)

「農地認識の違いにみる新規有機農業者の受け入れ－茨城県石岡市八郷地区の取り組みを事例として－」
1970 年代の有機農業運動の草分けである八郷町 (茨城県) の事例を取り上げ、有機農業への新規参入者の今日の特徴を実証的に明らかにした。生産調整政策以来、農家の農業からの後退に次ぐ後退は、農地保全のみならず地域の生活環境保全をも危機的状況に陥れているといってもよい。それ故、このイターン、U ターンによる農業新規参入者には地域再編主体として多大な期待がかけられている。

関会員は、流ちょうな日本語を駆使して八郷町農家の農地認識の変容と「仲立ち人」としての農協が (特に畑作地) 新規参入者受け入れを可能としていることを明らかにした。一年に一家族、妻帯者で 39 歳以下と条件を付け、これまで 30 家族が移住したが、彼らへの就農支援 (月 8 万円貸与) があったにしても、子育てをして将来有機農業で生活することができるのかという「基本的な」質問があった (浅野会員・

広島大、藤本会員・同志社大)。借地が可能となっても本当に「ムラ入り」が可能となっているのかという疑問 (足立会員・愛教大)、30 家族に押さえられているというのはどうした理由か (谷口会員・秋田県立大)、それでは地域の農地保全は不可能ではないか、と矢継ぎ早に質問が続き活発に議論がなされた。

兼業が深化する農家と有機農業参入者の期待が「畑地」で合致したが、定住し生活をするにはムラとの関係などを考えざるを得ない。環境保全の主体として新規有機農業就農者を考える時、研究のさらなる展開が期待される。

2 谷口吉光 (秋田県立大)

「環境問題解決プロセスの蛇行性－秋田県大潟村における水質改善農法研究の事例から－」

15ha の開拓農家が日本農業の明るい展望を開くやに見えた時代は長くはなかった。水質改善農法に関する産学協同の「圃場ブロック実験」を通して、環境問題解決のプロセスにおけるマネジメントの実践的課題を検討しようという報告であった。「不耕起栽培」同様の省力化を目指す「無代かき栽培」のプロジェクトを大潟村の 11 戸の農家と秋田県立大学の土壌肥科学・農業経済学・環境社会学専攻の「専門家」が共同して立ち上げ、その水質改善効果を測定した。農業者と研究者とのコミュニケーションの機会を多くすることでデータの提供、現場からの問題提起が頻繁となり、プロジェクト開始時に想定していた問題解決の「枠組み」が大きく変化していったと報告された。

不耕起栽培は「付加価値」がついているが、「無代かき栽培」は手間がかかり不耕起より大変である。「水質」はすぐに評価できるので良い視点だが農村開発は大変時間がかかるテーマだと指摘したのは細川会員 (京都精華大)。コミュニケーションで何が得られたのか、「半」専門家の機能とは何だろうかと問いかけたのは寺田会員 (明治大) であった。この点をもっと突っ込んで問いただしたのは脇田会員 (龍谷大) で、営農集団、自治会、販売組織などがどんなチャンネルでコミュニケーションしているのかが分からない点を指摘した。(職人的な) 農業者が他者と話をする事自体が問題解決への意欲の表れであり、究極的な八郎潟の問題としては排水ポンプの更新時期 (40 年経過) にさしかかってこの 300 億円ともいわれる莫大な投資が可能かどうか！といった谷口発言が飛び出した。

3 加藤鉄三 (立教大非常勤)

「物乞いジカと襲撃グマ－アメリカ西部国立公園における野生動物問題の環境史－」

野生動物問題のアメリカ的起源とウイリダネス保存という定型化されたアメリカ国立公園への彼らの考え方が「何を見えなくさせていたのか」が報告者の基本的な問題意識である。

この問題は米国の 1910 年代のフォードシステムによる自動車の普及、その結果生じたマス・ツーリズムに端を発していた。膨大な資料を駆使してこの「犯人捜し」を徹底して行った。合衆国西部国立公園における「野生動物問題」は、①旅行者集中地区における野生動物 (シカ・クマ) と旅行者の問題、②公園全体での野生動物の個体数増加に伴う生息地の劣化、その対策問題にあるとする。

報告は、前者 (①) の問題に限定し、状況認識、問題発生 of 文化・社会的背景 (旅行者)、さらにヨセミテ溪谷の「人間－植生－野生動物関係」の長期的変化について述べられた。

1890 年代にすでに「無意識の給餌」が開始されていたことなども指摘され、そもそも先住民を排除した (用地接收) 歴史そのものにある (オカノウチ氏?・法政大)、1920 年代のイエローストーンで起こった「キャンプ問題」、スポーツハンティング (西崎会員・福島大) も大きなテーマだと指摘された。

米国のステレオタイプ (Wilderness)、旅行者問題、言うなれば都市の問題を問うべきであるという報告者の指摘が印象的であった。

開催役員との打ち合わせで議論を早く切り上げたが、隣のセッションでは延々と白熱した議論が続いていた。本セッション会場に参加された会員の方々にはもっと議論ができたことをお詫びします。

B 部会：活動の内側から論理化すること—自由報告B部会

秋津元輝（京都大学）

今回の自由報告には部会のテーマが設定されていなかった。聴いている途中は内容を追うのが精一杯で3つの報告のつながりなどに思い至ることはなかったが、少し時間がたってふり返ってみると、不思議とみえてくることもある。もしかしたら、背後にはプログラム担当者の深遠な配慮があったのかもしれない。

第1報告「街並み景観づくりと山村社会の内発的発展—山形県金山町を例に」（奥田裕規・森林総合研究所）は、景観形成についての金山町の長年の取り組みを、「内発的発展」と「コモنز」という2つの概念で読み解こうとしたものであった。金山町は、地元で生産される金山杉を使った白壁の「金山型住宅」を積極的に奨励してきたが、その努力が今では町民の景観形成意識として結実し、形成された街並み景観は町民の「コモنز」として地域の発展を支えているという。そこから『内発的発展』は『コモنز』のうえに成り立つ」と結論する。さすがに、それはちょっと短絡的ではないか。質疑でも、金山町の発展を支えたより詳細な条件について質問が相継いだ。ところで、この報告が「活動の内側から」であるといえるのは、報告者の奥田氏が1995年の山村振興法の改正に関わっていたと話されたからである。残念ながら、その法律策定のプロセスと今回の報告との関係について詳細は語られなかった。報告の趣旨とはズレるが、政策を創るという「活動の内側」において、どのような地域・環境認識が働いているのかという問いをもってみると、聴く側としては新たな興味がわいてくる。

第2報告「流域ガバナンスにおける流域委員会の機能—武庫川流域委員会の中間的検証」（中川芳江・榎ネイチャースケープ）は、自らが委員として参加する流域委員会の問題点について、まさしく「活動の内部から」整理しようとした報告であった。質疑をへて明らかとなってきた論点は、一委員として中川氏が主張したい流域合意のあり方と、他の委員やマスコミなどが設定しようとする意見対立のフレーミングとの間にズレがみられることである。だが、この論点がみえてくるのにいささか時間がかかった。中川氏には「合理的」な流域合意形成についての意見があり、それを委員会の中で主張し、他の委員に認めさせることは氏の抱える切実な課題なのだろう。しかし、その切迫感から少し距離をおいて、委員会内部や外部のマスコミなどにおける合意形成問題のフレーミングを解明し、それを前提としながら、自己の主張の舵取りをおこなうことも必要だと思う。それによってこそ、他の委員を説得する道がみえてくるだろうし、報告でも聴衆の理解をもっと容易に得ることができると思われるからである。活動への情熱を失うことなく、同時に冷静な論理化をおこなうことのむずかしさを感じた。

第3報告「NPOと行政との協働—地方自治体における委託事業の実態と事業評価に関する事例調査」（萩原なつ子・立教大学）は、宮城県環境生活部次長という萩原氏の行政実務経験から生まれた研究である。結論をひらたくいうと、NPOと行政が対等な立場で協力して働くには、もっとお互いをよく知らなければならない、ということだったと思う。質疑で特徴的だったのは、どちらかといえばNPO寄りの質問者に対して、萩原氏がNPOと行政の仲をとりもつコーディネーター的な立場で発言されていたことだ。NPOと行政との協働には、「コーポレーション」「コラボレーション」「コプロダクション」という3Cがあるということだったが、それにコーディネーションも含めた4Cが求められているのかもしれない。もっとも、現在の日本の状況ではNPO間の関係を調整するNPOも多く設立されていると聞く。NPO団体の重層性についても盛り込んで説明してもらうとう少し踏み込んだ議論が可能だったかとも思うが、それは限られた報告時間のせいなのだろう。

なお、萩原氏からは研究委員として自由報告への活発なエントリーを求める旨の叱咤があったことを付け加えておく。まったくその通りである。

7 環境三学会合同シンポジウム報告

変容する森林荒廃問題と社会科学—「環境三学会合同シンポジウム2007 森林保全と持続可能な管理」印象記
大倉季久（法政大学大学院）

これまで「安い外国産材に負けた」ことが原因だとしばしばいわれてきたわが国の森林荒廃問題をめぐる状況が、今日大きく様変わりし、木材需要拡大の努力が必ずしも問題解決に繋がっていくわけではない現状が3学会それぞれの立場から明らかにされ、知見が共有されたことが、今回の合同シンポジウムの最大の成果であったと思う。ここでは3学会それぞれの報告を簡単に振り返り、そのうえで、全体を通しての感想を述べたい。

小林紀之氏（環境法政策学会）は、近年、木材需要が増大している中で、造林放棄地が拡大し、森林消失とも呼ぶべき、これまで経験したことのない新たな事態が各地で生じている様子が報告された。木材需要が増大する中で、昨今世界的に木材価格が上昇しつつあり、国産材の活用にも目が向けられつつあるが、そうした需要拡大が再造林の放棄という現象を生んでいるというものであった（木材価格の上昇とともに再造林放棄地が拡大するというこの逆説的な現象は、きわめて社会学的な問題だというのが筆者の見解であるが、これについてはここでは措いておく）。

土屋俊幸氏（環境社会学会）の報告は、15年前に行われた同一集落の調査データとの比較に基づいて、森林所有者の管理意欲が著しく低下している実態が明らかにされた。管理意欲が低下していく中では、わずかな価格の上昇が再造林放棄へと繋がっていく可能性が高まる。過疎化、高齢化、さらには限界集落化ともいうべき状況に直面している日本の山村社会は、林業の再生以前に地域社会の再生という重い課題を背負っていることがわかる。

では、所有者の管理意欲の回復を図りながら森林の荒廃を防いでいくためにはいかなる努力が必要だろうか。寺西俊一氏（環境経済・政策学会）の報告は、そうした森林管理の支援／推進のために近年各地で創設されている森林環境税について、神奈川県「水源環境税」の創設をめぐる動きが報告された。「県民」による森林管理費用の負担という新しい動きを、いかにしてかつてのような都市と山村との経済的な循環の再建に結びつけていくのか、そのゆくえは、依然として不透明である。

このように、さまざまな問題が指摘されることは、今日の日本が直面している森林問題の複雑さを示すものではある。ただ、この問題の困難なところは、これまでこの問題が社会科学のなかで議論されてこなかったことではなく、むしろ問題に対して多様な角度から議論が行われ、提言がなされてきたにもかかわらず、林業の現場では解決の糸口すら見えてこないという現実にある。今回のシンポジウムでも「地域ガバナンス」や「グリーンツーリズム」など、問題解決に向けたさまざまな萌芽的な実践が報告されていたが、この問題に対する社会科学の貢献可能性は、ローカルな局面で生じている問題に対するさまざまな実践とグローバルな木材売買のネットワークの構造変動、またそれに対する日本の木材業界や森林行政の反応などのかかわりあいを解明し、多様な実践を規定し方向づけている要因を明らかにしていくことを通してこの問題を引き起こしているメカニズムを捉えていくことではないかと改めて感じた次第である。この問題に対する環境社会学の貢献可能性も、ひとえにこの点に関していかにオリジナルな視点を提起していくことができるかにかかっているように思われる。

第二部の討論の最後に速水林業の速水亨氏は、「日本はこれまで世界中から木を買ってきたが、日本が木を買った国の人々は、何がなんだかわからないうちに森を失っていった」と述べていた。今後の木材市場を、輸入に頼らず、現状の森林の蓄積を有効利用しながらどう創り上げていくかを考える必要性を説く中での発言であったと思われるが、国際的に木材需要が増大し、木材価格が上昇傾向にある中で、成熟しつつある国内の人工林資源の活用が目向けられ始めている今日、むしろわれわれはこの発言を、他国の、それも過ぎ去った出来事としてではなく、日本の森林問題の今後を考えるうえでの重大な警鐘として受け止めるべきではないだろうか。

8 『環境社会学研究』自由投稿論文のお知らせ

『環境社会学研究』第14号の自由投稿論文の申し込み締め切りは2008年1月15日(火)です。下記、投稿申し込みフォームに必要事項をご記入のうえ、葉書、E-mail等でお申し込みください。原稿最終提出締め切り日は2月29日(金)必着となります。編集委員会では論文を受け取った時点ですぐに査読手続きに入ります。投稿が早いほど、査読結果を踏まえて原稿を修正する時間が長く取れることになります。

規定枚数のオーバーや英文要約の不備など、投稿規程から見て問題のある原稿が散見されます。この場合、投稿が受理されないこともありますので、『環境社会学研究』最新号または学会ホームページで投稿規程や執筆要項をご確認のうえ、原稿を送付してくださいますようお願いいたします。

【お問い合わせおよび投稿の申し込み先】

環境社会学会編集委員会事務局
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1 立教大学社会学部 関礼子研究室
Tel：03-3985-4723 Fax：03-3985-2833（共用）
E-mail：editorial_office@jaes.jp

投稿申し込みフォーム

『環境社会学研究』第14号に投稿を申し込みます。
タイトル：
論文・研究ノートなどの種別：
氏名：
所属：
連絡先：自宅・勤務先（どちらかに○をつけてください）
住所：〒
Tel：
Fax：
E-mail：

査読システム変更および査読委員の依頼について

編集委員会では、社会学以外を専門領域とする会員数の増加、それに伴う問題関心の多様化を受けて、査読システムを見直しし、「査読委員」を設けることになりました。したがって、今後の自由投稿論文の査読は、編集委員および査読委員を中心に行うことになります。

編集委員会ではテーマ、キーワードごとにリストアップした「査読委員」に、自由投稿論文の査読をお願いいたします。現在、「査読委員」の選出作業を順次進めております。「査読委員」をお願いする会員の皆様には、個別に依頼させていただきます。会員の役割のひとつとして、ご快諾いただけますよう、お願いいたします。

9 事務局から

9-1 新入会員の紹介（2006年6月～10月承認分、22名、五十音順）

- (正) 李 春子 (イ チュンジャ) 関西大学 神戸女子大学
- (正) 巖 圭介 (いわおけいすけ) 桃山学院大学社会学部社会学科
- (院) 加藤壮一郎 (かとう そういちろう) 千葉大学人文社会科学研究所博士前期課程1年広井良典研究室所属
- (正) 上林徳久 (かみばやし のりひさ) 財団法人リモート・センシング技術センター
- (院) 熊田 豊 (くまだ ゆたか) 関西学院大学総合政策研究科前期課程
- (正) 小池 啓道 (こいけ ひろみち) ——
- (院) 小林 誠 (こばやし まこと) 首都大学東京大学院社会科学研究科社会人類学専攻
- (正) 近藤紀章 (こんどう のりあき) 滋賀県立大学地域づくり調査研究センター
- (正) 佐藤 寛 (さとう ひろし) 中央学院大学
- (院) 清水万由子 (しみず まゆこ) 京都大学大学院地球環境学舎博士課程
- (院) 七五三泰輔 (しめ たいすけ) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
- (正) 瀬川久志 (せがわ ひさし) 東海学園大学経営学部
- (正) 高橋猛生 (たかはし たけお) 日本歯科大学用度宮繕部
- (正) 中川宏治 (なかがわ こうじ) 滋賀県琵琶湖環境部森林保全課
- (院) 程 鵬心 (テイ ホウシン) 和歌山大学教育研究科院生
- (正) 土器屋美貴子 (ときや みきこ) つばき動物診療所／看護師
- (院) 宝 成 (ホウ セイ) 和歌山大学教育研究科院生
- (正) 堀内正弘 (ほりうち まさひろ) 多摩美術大学造形表現学部デザイン学科
- (院) 三橋奈緒 (みつはし なお) 東北大学大学院文学研究科
- (院) 楊 軍 (ヨウ ゲン) 立命館大学大学院政策科学研究科
- (正) 吉田充夫 (よしだ みつお) 独立行政法人国際協力機構国際協力総合研修所国際協力専門員(環境)
- (院) 林 雅 (リン ヤ) 高崎経済大学地域政策研究学科

9-2 退会(17名)

加納弘二, 村松陸雄, 尾崎煙雄, 田中修二, 岡田久仁子, 藤堂史明, 佐野淳也, 石川徹也, 鈴木廣, 山碕尚司, 久野清隆, 野村克己, 松井一晃, 久野清隆, 松本俊光, 押谷静芳, 富永健一

9-3 会費納入のお願い

2007年度の会費未納の方につきましては、払込用紙を同封いたしました。すでにお振込みいただいた方には、行き違いになってしまう場合がありますので、ご容赦ください。❖

『環境社会学会ニュースレター』
第44号(通号49号)
発行日：2007年11月27日

●

JAES Newsletter
No.44
November 6, 2007

●

編集・発行：環境社会学会事務局
〒194-0298 東京都町田市相原町4342
法政大学社会学部 堀川三郎研究室気付
Tel: 042-783-2427
E-mail: office@jaes.jp
郵便振替口座：00530-8-4016
口座名：環境社会学会
http://www.jaes.jp/

版下作成：森久聡（法政大学大学院）